本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2023 小川さやか

東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

時間をあたえあう
―タンザニアの零細商人の贈与論―

小川さやか
（立命館大学先端総合学術研究科・教授）

講義の狙い

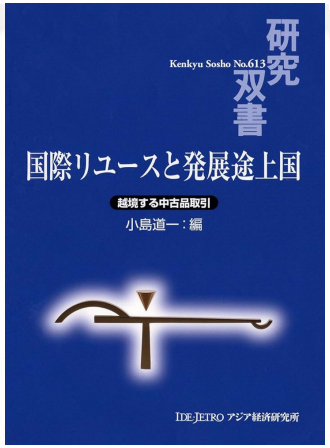
本講義では、まず文化人類学の基本的な考え方について紹介し、
つぎにデヴィッド・グレーバーの人間経済と商業経済の対比をもとに
タンザニアの商人たちの事例をお話しすることで、わたしたちの
資本主義社会の息苦しい空気の一端には、人間を数値や貨幣に換算
できるという価値観があることを述べます。

オルタナティブな経済をいかにつくるかという観点において、
私たちが人間らしさ、人間と人間のかかわりの原点をいかに再構築
していくことができるかを討論できれば幸いです。

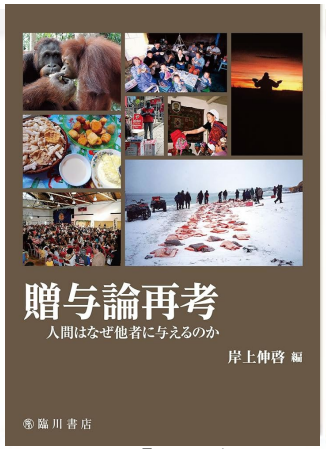
自己紹介

京大大学院時代（博論）

小川 さやか 著『都市を生き抜くための狡知』
世界思想社，2011年.



小島 道一 編『国際リユースと発展途上国』
アジア経済研究所，2014年.



岸上 伸啓 編『贈与論再考』
塩川書店，2016年.

中谷 文美，宇多川 妙子 著『仕事の人類学』
世界思想社，2016年.

『現代思想 2018年11月号』 青土社.

小川 さやか 著『「その日暮らし」の人類学』
光文社新書.

小川 さやか 著『チョンマンキンのボスは知っている』
春秋社，2019年.

文化人類学という学問について

「参与観察」という研究手法を使って他なる世界のフィールドワークを実施。

「参与観察」＝アマゾンの狩猟採集民、アフリカの農耕民、アジアのスラム
　といった地域に入り込み、現地の人びとの営みに参与しながら観察・記録。

人類学は、異文化に関する研究を通して自文化に対する相対主義的な視座を
獲得し、そこから人類の営みに関する普遍的な議論を展開する。

相対主義―元々は自文化中心的な物差しで他者の文化をまなざす視座を否定し、
　　それぞれの文化に優劣はないとする視座
普遍主義―人間も人間の文化も多様だが、そうした多様性のなかに人間とは何か
　　人類の社会とは何かを紐解くヒントがあるとする視座

オルタナティヴな世界を構想する糸口は提示するが、ある文化と別の文化のどちらがより優れている、より良いかといった評価はしない。

例）家族規範・家族制度の問題を考える
　　一夫多妻、通い婚

世界に確かに存在する異なる人類の知恵や実践から、同時代を生きる人々とともに社会を構想し、変化させることを目指す。その際には、「文化」の問題を超えた、より大きな普遍的な問いを検討する。

普遍化する時の問いは、けっこう大きい。
たとえば、人類にとって国家とは何か、人類にとって社会とは何か
人類にとって暴力とは、贈与とは、歓待とは、所有とは‥‥その根源は何か。

こうした問いを考えていくことは、即自的な解がないことに耐える力が必要である。

■私自身の研究の関心のひとつ＝無条件の条件を考えること

これはもしかしたら人類学者の思考の癖かもしれない。

国家がなくて、貨幣がなくて、コミュニティがなくて、契約書や履歴書がなくて、どうやって社会は成立しているのかという探究の面白さ。

と同時に、もしかして国家っているの？貨幣っているの？コミュニティって重要？契約書なんて要らなくない？などと、翻って自文化を眺めてみると、何のために、どうして私たちはこれを必要とするのか。それはどんな論理で生み出され、なぜ成り立っているのかが見えてくる。

「負債の歴史を語ること、それは必然的に
市場の言語がどのようにして人間の生活の
あらゆる側面に浸透するようになったのかを
再構成することでもある」（p.134）

グレーバーは、いかにして人間の経済生活に
おける単なる義務（贈与のモラル）が、負債へと
置き換わったのかを論じた。

本講義では逆に、人間関係の言語がいかにして
商業経済のあらゆる側面に浸透し、商行為に
おいて生じた負債が、人間生活の単なる義務
（贈与のモラル）に置き換わっていくのかを
検討します。

デヴィッド・グレーバー 著，酒井 隆史 監訳
『負債論 貨幣と暴力の5000年』
以文社，2016年.

グレーバー：商業経済は比較的に新しいものであり、人類史のほとんどの時代は
「人間経済」が支配的であった。

人間経済≠人間的なやりとりにあふれた社会という意味ではない。

人間経済＝社会的通貨を使用する経済であり、経済システムの主要な関心が
「人間存在の創造と破壊、再編成にある」経済を指す。

例）多くの社会には、婚資がある。花嫁と交換される真鍮棒やクジラの歯、
タカラガイ、牛などの通貨は、花嫁をもらい受けた負債を清算するためで
なく（つまり花嫁の代金ではなく）、どれだけ通貨を積んでも花嫁は
清算不可能であるということを確認するために支払われた。

つまり、「人間経済」において貨幣とは、何よりもまず貨幣よりもはるかに価値
のあるなにかを負っていることの承認として存在する。

このような人間経済では、それぞれの人格は唯一のものであり、比類なき価値を持つ。その理由をグレーバーは、それぞれの人格が他者との諸関係のただひとつの結合中枢（ネクサス）となっているからだと説明する。

たとえば、ひとりの女性は、娘であり、姉妹であり、愛人であり、ライバルであり、仲間であり、同世代者であり、教育者であるといった形で多数の人々を結びつける「ハブ」となる。だから、女性と貨幣を交換することは、このような人間関係を創造したり、維持したり、あるいは切断したりすることを意味する。

このようなかつての人類社会にあった「通貨」は、富を蓄積する手段ではなく、社会を創造したり、破壊したりする、社会的通貨として機能し、人間経済は人間がいかなるものとも等価たりえず、究極的には人間どうしでさえも等価ではないということを、たえず想起させるものであった。

人間経済が商業経済に席を譲る時に何が起きているか

人間をその人たらしめている相互関係や共有された歴史、集合的な織物として編まれている社会そのものから、その人間を切り離し、人間を市場のルールにおいて、形式的に平等な存在、根本的に同じ種類の人間であると想定する「暴力」が働いている。

グレーバーの議論は、「互酬性」に対する批判的検討から始まる。

互酬性は、文化人類学を含む研究者が公平、均衡、公正、対称性といった感覚に根差した正義のイメージとして特権的な地位を与えてきた概念である。

だがグレーバーは、互酬性とは、市場交換と同じく「均衡のとれた交換原理の変種」（ibid:137）に過ぎず、それこそが「負債は返さなければならない」とするモラルの混乱を生み出すものだと述べる。

これに対して、互酬性には回収されない人間関係の在り方として、コミュニズムの問題を取り上げている。

グレーバーは、コミュニズムにある状態とは、「いかなる収支決算（損得計算）もなされていないのみならず、それを考慮することさえ不快とみなされている、あるいは端的に異様であるとみなされている」状態であると述べ、コミュニズムは共産主義のような生産手段の所有とは何も関係がなく、あらゆる人間社会に存在するものであり、あらゆる人間の社交性（社会的交通可能性）の基盤であると論じる。

そのように考えれば、資本主義のような経済システムでさえ、コミュニズムの基盤の上に成り立っている。

彼はこうしたコミュニズムを既存のコミュニズムをめぐる議論から区別するため、「基盤的コミュニズム」と呼んでいる。

基盤的コミュニズムとは何か

「各人はその能力に応じて（貢献し）、各人にはその必要に応じて（与えられる）という原理から出発すると、個人的所有権または私的所有権の問題、そしてより直接的かつ実践的である、誰がどのような条件で何を入手しうるのかという問題を無視することが可能になる。その原理が行為を制御する原理である場合には常に、たった二人の人間の交流であってさえも、私たちはある種のコミュニズムの現前に立ち会っているといえるのだ」（p.142）。

私たちの日常でも、家族や友人など親しい人々にモノを与えたり支援をしたりするときには、相手が返礼するかどうかをいちいち計算しないことは多々ある。

例）「たばこの火を貸して」「そこの醤油をとって」
例）会社の人間関係でも、「ちょっとこれあそこの机に置いて」という行為にいちいち対価を計算していたら、とても会社は回らなくなるだろう。

つまり、私たちも日常的な人間関係では、「誰しも晴れの日も雨の日もある」と知っているし、何かあった時にも「まあ、あいつはこういうやつだからな」とその個人の「人格」について考えたり、「最近、子どもが生まれたばかりだからきっと大変なんだろう」とその個人が置かれた文脈について想像したりする。

こういう時に、私たちは、物事の成否を一律の基準では計れないとしている。

ところが、「商業経済」の文脈では、こうした各人が置かれた社会的な文脈からその人間を引きはがす「暴力」が遍在する。私たちが慣れ親しんでいる成績や業績や生産性といった指標はみな、私的な事情や個々の人格を無視することではじめて計算可能になったものだ。そして人間が、社会的な文脈や固有性をもたない、形式的に「平等」「同種」な存在であるとしてやり取りすることから、「負債」を支払う義務が生じる。

人間はほんとうはそれぞれ全く違う状況を生きており、それぞれ違う身体や能力を持っている。でも「仕事が遅い」⇒「恋人にふられたばかりだから」「彼女は、手が小さいから」ということを考慮していたら、私たちはスムーズな経済活動ができないと信じてている。これぞ、商業経済が人間の経済を凌駕した証左だ。

そして、人間は形式的に同じだと仮定することから、「負債」「負い目」が生成する。一方へ何かを与え、それが返済されていない状態になると、そこには「ヒエラルキー」が発生する。「形式的に平等な人間」であるのが、デフォルトなのだから、あるべき「平等な状態」を回復することは必須で、そのためには、負債を支払わねばならないという義務が生じる。

すなわち、個々の人間や人格は、貨幣や物とは等価ではない（ゆえに計算できない）し、他の人間をもってすら置き換えられないという人間経済の前提を取り払い、人間は形式的に平等であるという仮定をつくることが、負債の源泉にあるというのがグレーバーの議論の骨子である。

このようにグレーバーは人間経済が商業の経済に席をゆずるときには、本当は計算不可能であるはずの「人間」「人格」が計算可能なものとなるという事態が進展すると論じた。

これに対して、私が調査しているタンザニアの商人たちは、人間や人格が形式的に平等で計算可能だと想定される商業においても、それぞれの人間の人格的な異なり、置かれた状況の異なりにこそ「賭け」ていくことで、商業経済から人間経済に道をひらき、それを商業経済の一部に取り込んでいくプロセスが起きる。

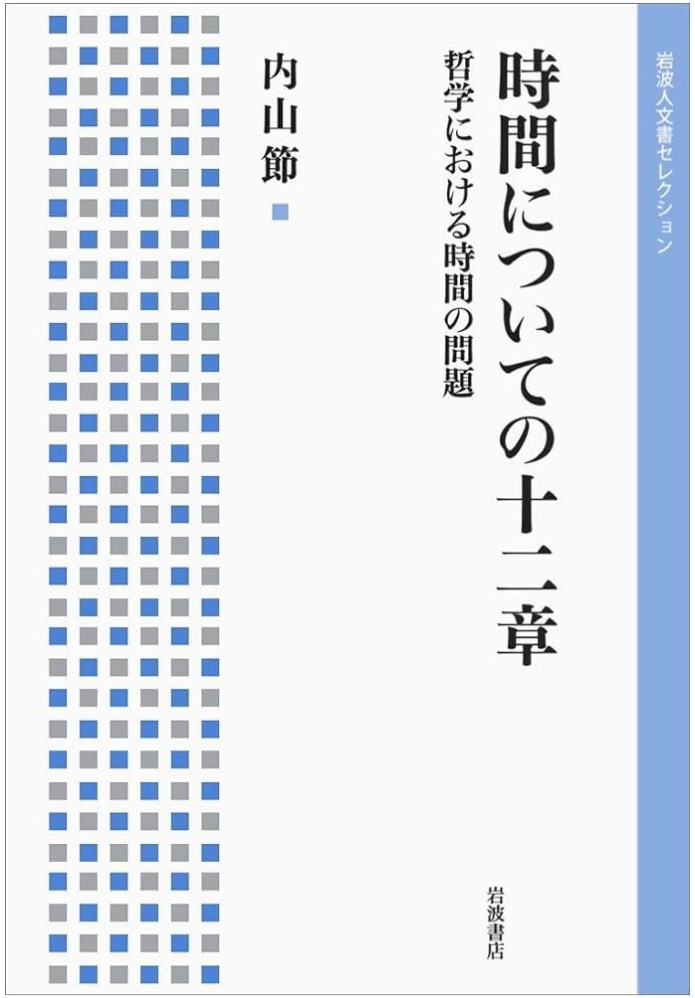
つまり、彼らは人間経済を、商業経済を回していく不可欠な要素にしていく。どういうことかを説明していこう。

等質的で均質的な時間と負債

現代に生きる私たちの多くは、時間で対価を計算することに慣れている。例）「時間によって労働を売る」

現代社会では、均質的に時を刻む単線的な時間の観念こそが対価の支払いから生産性や効率性、そして「スキマ時間」の使い方といった余暇の充実度の計算に至るまで、あらゆる生活の基盤となっている。

このような時間の観念は、数多くの研究が指摘する通り、工業生産や賃労働が始まって以降の近代的な産物。近代的時間は、抽象的で計量可能なだけでなく、直線的で不可逆的なものである。そして人間が自然や他者との関係の中で多様な時間を創るのではなく、人間のほうが等速的な時間に管理・支配されることこそ、現代の生きづらさを生み出している（⇒右の本を参照）。



内山 節 著
『時間についての十二章』
岩波書店，2011年.

近代の時間の観念は、「負債」の計量可能性や不可逆性にも反映されている。

例）融資を受ければ、利子がつき、利子は時間の経過とともに均質的に増えていく。ネットカフェに滞在するにもＤＶＤを借りるにも時間単位で料金が決まり、期限を過ぎれば延滞料金がかかる。

だが、私たちが身体的に経験している時間は、TwitterやYouTubeを眺めている時にはあっという間に過ぎ、退屈な講義を聴いている時には遅々として進まないような不均質なものである。

病を患ったり老いたりといった身体の変化や日々のささやかな体調変化によっても時間は伸び縮みする。私たちが人生で経験する時間は、未来に向かって均質的かつ単線的に伸びてはいかず、恋に落ちたり事故に遭ったりといった偶然的な出来事によってそれまで積み重ねてきた時間の流れが急に変化し、あっちこっちと曲がりくねり、濃密な時間とぼやけた時間が入れ子状に訪れる。

しかし、そうした個々が感じる身体的・経験的な時間感覚は、負債の支払いにおいて無視される。

３時間が１時間のように過ぎ去ったので、ネットカフェの滞在料金も１時間分で良い！とはならないし、１時間が２０時間のように進まなかったので、返済期限を２０倍遅らせてもOK！ともならない。

充実した時間が過ぎたので過去にさかのぼって負債が増えることも、空虚な時間が過ぎたので負債が減ったりすることもない。人生は不条理だ・・・。

このような世界で生きていると、食事を奢られたり親切にされたりした心理的な借りにも、利子や延滞料金がつくような感覚に襲われる。

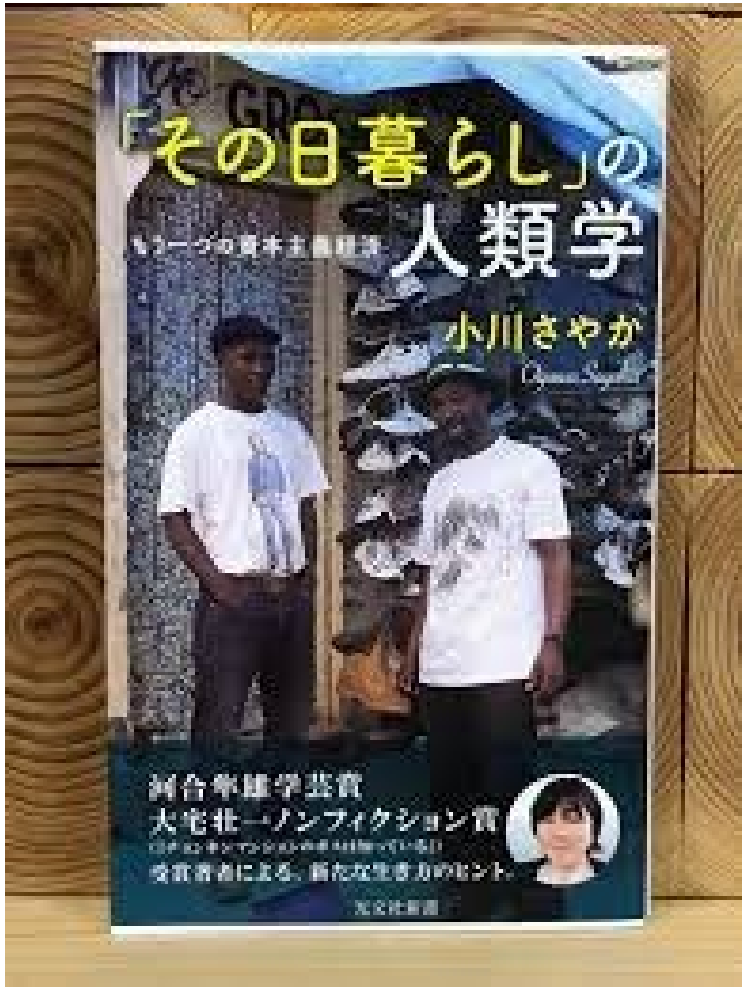
その結果として、私たちの世界では、負債や借りは返済する必要があるだけでなく、なるべく早く返済すべきものになってしまっている。

私が2000年代初頭から現在まで断続的に調査を続けているタンザニアのインフォーマル経済従事者のあいだでは、均質的で単線的な時間の観念は希薄である。

タンザニアでは都市部の労働人口の約７割がインフォーマル経済従事者（雇用統計の乗らない都市雑業）で、その約半数が広い意味での零細商人だ。

商人たちは工場労働者や会社員のように決まった給与で働くことに慣れておらず、また被雇用者になることを常に希望しているわけでもない。

その理由を彼らは、未熟練労働者の彼らの労働条件が悪いからではなく「固定給だから」、つまり、その時々の必要性に応じて給与が変動しないからだと説明する。



小川 さやか 著
『「その日暮らし」の人類学』
光文社文庫，2016年.

画像提供：冒険研究所書店

画像：講師提供

多くの商人は「子どもの学費の支払いを迫られた」「家族が急に病気になった」といった事態には多く稼ぎ、生活のゆとりがある日はゆっくり休むという働き方をしている。

零細商売は浮き沈みの激しいギャンブルであり、時間をかければ、その分利益が増えるわけではない。

「よい風が吹いた」日の翌日は仕入れ値を値切らなかったり在庫を引き取ってあげたり、「ついてなかった」仲間によい商品を譲ったり客に安く売ったりし、「風が吹かなかった」日の翌日はその逆のことを他者に期待する。

休むのも働くのも、そして「他の誰かとの関係でどの程度の稼ぎを自身のものとする」のかも時の流れに応じて決める彼らは、毎月決まった給与しか支払われず、個々の必要性に則して給与が日々変動しないのも、そして雇用者や同僚の必要性に応じて自身が給与を日々変動させられないのもおかしいと語る。

つまり、商人たちにとって、24時間は誰にとってもいつでも等しい価値を持つわけではない。彼らは、一定の時間同じように努力しても「それぞれの日は似ていない」のだから、日々手取りが変動するほうが自然だと考える。

同じように負債も個人の身体的経験的な時間感覚に応じて変化するほうが自然だ。２４時間が誰にとっても同じ価値を持たないなら、取引する人間は形式的に平等であっても、彼らが過ごしている時間は平等ではない。

では、平等ではない時間を過ごしている者同士で貸し借りが成り立つとはいかなることだろうか。たとえば、ある商人が不幸で停滞した時間を経験した場合、その分、彼は負債額を減らしたり、返済期限を延ばしてもらえたりするのだろうか。そうではない。商人たちは、そのような単純な計算で不平等な時間に対応したりはしない。それでは個人の時間感覚の質的変化に応じて負債の支払い期限が伸び縮みしたり、負債の存在形態が変化したりしても、商業経済が成立するとはどのようなことだろうか。

この問いを解くことは、私たちの経済を根本から考え直すことになる。

ツケ＝金品と代金の交換と「チャンス」の贈与

・行商人＝得意客からの頻繁な掛け売りの要請（行商人Aの89日間、1日平均3.6枚）
・「今度の給料日に払う」「貯蓄講の順番が来たら払う」という約束よりも
「カネが手に入ったら払う」という曖昧な口約束。

・行商人たちは、得意客の給料日（週給や月給）や貯蓄講の順番を把握して訪ねていくが、居留守を使われたり、「子どもがマラリアになった」と断られたり、時には「待ってくれないなら、返品する」と言われたりして苦戦。

・彼らは、その日に仕入れた古着の種類やランクにあわせて行商ルートを選択する。ルートから外れるツケの回収に拘泥すると、商売が立ち行かなくなる。
⇒行商人たちは、何度か通って相手に支払う気がないわかると、しばらく放置し、やがて「ツケ」自体がうやむやになった。

不思議だったのは、ツケを認められた側が「まだ払えない」「ないものはない」と堂々と開き直るのに対して、ツケを取り立てる側が「家賃が払えない」などと必死に訴えなければならないこと。

・当然、商売においてツケを認めることには商売戦略上の合理性がある。
　・得意客の維持・確保、・ツケの取り立てのついでに別の商品を売る機会
　・仕入れ先の中間卸売商との駆け引きの材料として販売枚数（販売量）etc..

・また彼らは、経営に余裕がある時に積極的にツケを認め、経営に余裕がない時に取り立てることで、商売のバランスを取ってもいた（貯金の代わり）。
　cf. 2004年のコレラ流行時（cf. 小川2020）

それでも日々余裕がない中で、ツケが何か月も放置され、そのままうやむやにされることが多いことがどうしても不思議だった。

未払いのツケをなぜ取り立てに行かないのかと尋ねると、彼らは「相手が自発的に払ってくれないのだから、まだ彼／彼女は困難のさなかにあり、いま取り立てに行っても交渉に負ける」と言った（cf. 小川2016）

ただ、ツケが返ってこなくてもいいのかと聞くと、「ツケはいつか返してもらうが、まだその時ではない」「カネを稼ぐまではいいと言ってしまったのに、相手の時間的な余地（*nafasi*）を返してもらうのは難しい」などと返答された。

掛け売り＝商品やサービスの支払いを先延ばしにする取引契約だが、彼らはこれを市場交換と贈与交換のセットで考えているのではないか？

ツケは、商品やサービスの対価であり、支払うべき「負債」である。だが、ツケを支払うまでの時間的猶予、つまり客が現在の困難を解決し「カネを払う余裕ができるまでの時間」は「贈与」したものなので、ひとたび「あげた」時間を取り上げるには特別な理由がいる、と。

ツケ＝支払い猶予を与える契約を「代金の支払いの契約」と「時間・チャンスの贈与」に分割して考えると、つじつまがあうことが多々ある。

ツケが売買契約に過ぎない場合、ツケを支払った時点で、客に負債はないはず
だが、実際にはツケを払っても、客は商人に「借り」を持つようなことを語る。

行商人たちは客との交渉で「君がピンチの時に俺はいつもツケを認めてきた」と
言うことで、高値で買わせたり、在庫を引き取ってもらったりする。
より奇妙なのは、ツケが未払いな客が、「ツケのお礼」にと食事をおごってくれる
ことだ。奢る余裕があるならツケを払えと私は思うが、彼らは思わない。
さらに、客はツケのお礼に自身の商売で行商人に掛け売りしてくれもするが、
行商人のツケと客のツケが相殺されることもない。

こうした事態を説明するには、ひとつひとつの掛け売りのなかに商品支払いと別に
贈与交換が含まれていると考えるしかない。そして仮に「商品代金の支払い」は
遂行されなくても、「時間や機会の贈与」に何らかの返礼が遂行されるのだと
したら、商売の帳尻が合わなくても、生活全般の上では帳尻が合っているような
気もするのだ。

時間・機会の贈与の「借り」と金品や親切の「借り」

行商人たちは、掛け売りや金銭の貸借に限らず、食事を奢ったり、小銭をカンパしたり、モノをあげたりといった贈与の場面でも、金品や支援の贈与と時間的な猶予・チャンスの贈与の二重性を語る。

たしかに贈与交換とはそもそも「時間」を介在して成り立っているものである。

ただ、タンザニア商人の事例で問いたいのは、「与えられた時間や機会」の負債が意識される贈与交換があるということである、あるいは本当に贈与したのは、金品や親切ではなく、それによって与えられた時間や機会であり、返礼すべきも、「時間や機会」であるという論理が成立する贈与交換があるということである。

タンザニアの都市住民たちはしばしば、「腹が減っているときに奢られる一皿と、楽しみのために奢られる酒は違う」と語る。あるいは「食べる」「睡眠をとる」「服を着る」といった人間が人間らしく生きていくために「必ずするべき（*lazima*）こと」と「水浴びをする」「適切な格好をする」といった「することが重要である（*muhimu*）こと」を腑分け、前者に関わる贈与やシェアと後者に関わるそれらは別の次元のものだと述べる。

酒のように一般的には娯楽やぜいたくとみなされる奢りあいでは、相手は次に「酒」を奢り返すことで贈与交換が完結する。レヴィ＝ストロースが『親族の基本構造』で述べた「ワインの交換」と同様に、なくても生きていけるモノだからこそ、その場限りのコミュニケーションを円滑にする手段となる。

これに対して、「腹が減っている」といった生存に関わる事態の贈与は道徳的な次元の問題であり、少なくとも与える時点で見返りや互酬を期待することは望ましくないと強調される。だが本当に見返りは期待しないのか、返礼は起きないかというと、そうではないようだ。

ピンチの時に助けられた者は、「一皿の料理」といったその時にもらったモノや「奢られる」といったコトよりも、それを受け取ったときに自身が置かれていた困難な状況とその変化に力点を置いた語りをする。

「あの時のおかげで生き延びた」「彼に手を差し伸べてもらったおかげで今の自身がある」。

そう語る人びとに何を（して）もらったのかと聞くと、「喉が渇いている時に飲んだ水は、そうでない時に飲む酒よりも美味いだろう」などと、与えられたモノやコトの価値を問うこと自体が不適切だと指摘されたり、具体的な記憶が風化していたりすることが多々ある。それが何であろうと、与えられたものは「生き延びるチャンス」に変わりがないと。

　他方、相手が窮地に陥ってすぐに返礼が期待できない状況で支援をしたり金品を与えたりした側は与えた金品や支援に対する見返りではなく、いつか将来に自身が難局を切り抜けたり、状況を変化させたりするための「時間」や「機会」が返ってくることを期待する語りをする。

たとえば、バスのコンダクターをしている友人は、「かつて自身が仲間に与えたものが一皿の料理であったとしても、自身の窮地がいますぐに故郷に帰る必要性であったら、一皿の料理やそれに相当する金銭を返してもらうよりも、たんに仲間が運転するバスにただで乗車させてくれるほうがありがたい」などの例を挙げ、

「何をもらったか、してもらったかを忘れ、それが人生にとって特別な出来事だったことだけが記憶に残るような贈与だけが本当に大事なものであり、残りの贈与はすべて遊び（ゲーム*mchezo*）だ」と指摘していた。

小括

ここまで、それが市場取引であろうと贈与交換であろうと、交換された金品とは別に／それ以上に「時間や機会の贈与交換」が重視されることがあることを見てきた。

ただし、こうした時間や機会の贈与はその返礼までに非常に長い時間を要するかもしれず、場合によっては自身が死ぬまで相手が不遇で、結果として返済されないこともある。

それゆえ、二者の間だけでは時間や機会の贈与を基盤とするエコノミーは成立させられない。次節では、より長いスパンで商業経済における帳尻と人生における負債の帳尻を考えてみたい。それは借りをもつ個人の多様な人格をネクサスにして、商業経済のただなかに人間経済を胚胎させることに他ならない。

タンザニアのインフォーマル経済における
生計多様化と「人間多様化」戦略

生計手段の多様化戦略と社会関係の多様化戦略

タンザニアでは、いまだ銀行口座を持つ者は20％程度。それは貯金に回す余剰の利益を生み出せなかったり、銀行アクセスに必要な条件（固定的な住所等）を満たせなかったりという理由だけでなく、零細自営業で稼いだ金銭を別の事業に投資したり、農地や家屋などの不動産購入をしたり、支援を求める他者に分配してしまうことにもよる (小川 2016)。

インフォーマル経済に対する主流の見方は、大きく変化してきた。国際労働機関がインフォーマルセクターを過剰都市化に伴う偽装失業層や不安定労働層の問題とした1970代、この経済は近代化に伴ってやがて消滅する部門だとみなされていた。

しかし2000年代以降、インフォーマル経済が縮小どころか拡大し続けていることが認知されるに従い、なぜこの経済が存続と成長を続けるのかに研究者の関心は移行した。

しばらくは、①フォーマル経済から排除・周縁化・搾取される人びとの営みという構造的な視座と、②国家や市場の不条理な規制に抵抗して自発的に国家やフォーマル経済から離脱した人びとの営みという新自由主義的な視座が対立していた。最近ではこの経済は、特有の起業家精神に基づく「別の種類の経済」であることが強調されるようになった。その企業家精神で強調されるのは、不確実性の高いビジネス環境での生計実践と社会関係資本への投資の特有の結びつきである。

生計多様化戦略＝不確実性の高い環境においてリスクを分散するための戦略である。つまり、単一の収入源に専業化すると、それが政策転換や市場の変化で立ち行かなくなった瞬間に生存が困難になるが、複数の収入源を持てば、特定の商売に失敗しても他の商売で食いつないでいけるという戦略。

社会関係への投資＝ハートが初期の論文（Hart 1975; cf. Hart 2020）で論じた通り、「富裕化が個人の努力や目利きではなく、その他大勢の犠牲の上に成り立つ」という成功した起業家に対する支配的なまなざしに対応した（再）分配の規範に基づくものであるとされる。

富を現金ではなく、「人間」のかたちで貯蓄する経済

これに対して私は、タンザニアの商人たちは、このふたつを組み合わせ、特有の岐路を描く明確な生計戦略を採っていると考えている。

つまり、１）資本主義経済で稼いだ金銭を他者に贈与／分配し、「借り」をもつ人間のかたちで「貯蓄」する、そして２）「借り」をもつ人間のなかから、その時々で必要なもの（金銭や財、情報、能力）を引き出しながら、資本主義経済における自身の商売を運営する、という市場経済と贈与経済の循環を繰り返すことで、不安定な環境で生き延びていく戦略。

まず、特定の事業を拡大するよりも多様な零細事業へと投資すること選好することについて、彼らは経済的なリスク分散と同時に、それが一つの事業をしていただけでは築けない、多様な人的つながりを形成する方法としても機能すると説明する。たとえば、香港や中国との貿易業で稼ぐ商人は、次のように語った。

「僕がアジア諸国に滞在して学んだことは、アジア人はみな銀行貯金を持っていて、バジェットなるものを考えて行動することだ。日本人である君は家を三軒、車を二台所有していても銀行口座に一銭もお金がないという人がいることが信じられないだろう。だがタンザニアではそれが普通だ。なぜなら、タンザニア人は銀行口座にあるカネは、いかなる人間関係も生まないと信じているからだ。何らかの事業に投資すれば、たとえ商売に失敗しても、人間関係だけは築ける」（2019年2月、ダルエスサラーム市）。

他方、タンザニアの商人たちは他者への贈与について「生計多様化」戦略と同じリスク分散の論理で説明する。彼らはそれを「人生の保険」という言葉で説明する。つまり、ビジネス環境が過度に不確実で、将来においてどのような事業が成功するか不明である状態では、特定の生計手段に頼るよりも多様な事業に分散投資する方が合理的なように、特定の人間関係に頼るよりも多様な人間に賭けたほうが合理的であると。いわく、成功して会社を設立することになったら起業家の友人が頼りになるかもしれないが、詐欺に遭うかもしれず、そうした場合に最も頼りになる友人は詐欺師である（cf. 小川2019: 86）。

彼らは、自身がどのような困難に陥るかが不透明である以上、どのような人間と関係を築くべきかを考えることに意味はなく、行動を起こす時点で可能なことはただ目の前にいる人間に与えることだけだと語る。そうして彼らは、偶然に出会った多様な人間に贈与をし、お返しを「自身が必要になるまで」あえて放置することで、「借りをもつ人間」を「預金」の代わりに貯蓄していくのである。

この贈与や親切を介して築かれる「人生の保険」は、私たちにとっての銀行預金やコネあるいは「出世払い」とは似て非なるもの。たしかに「俺のカネは、銀行ではなく友人のところにある」と彼らはよく言う。だが銀行預金と違って、自身が困難に遭遇した時に相手にも余裕がなければ、カネを引き出すことは難しい。またインフォーマル経済従事者の商売は浮き沈みが激しく、多様な職種を転々と渡り歩くため、貸したり贈与したりした時点での相手の資質や地位、可能なことは、自身が困難に陥った未来の時点では変化していることが多い。

だから、彼らの言う「人生の保険」は、将来に役立ちそうな人間に貸しを与え、コネを量的に増やす戦略ではないし、就職や出世を当て込んだ投資でもない。

「かつての借り」を返してもらうこと

【事例】私の調査助手ブクワは、二〇〇四年にムワンザ市で仲間の古着商人が妻の入院費の支払いによって困窮していた頃に頻繁に食費を奢ったり、金銭を貸したりしていた。しばらくして、その友人の妻は亡くなり、彼は親戚を頼ってタンガ市に移住していった。それから六年経ち、ブクワは紆余曲折の末にタンガ市に移住することになった。そこで彼は六年前に助けた仲間と偶然に再会した。そして同市で羽振りの良い生活をしていた彼に、職探しまでの期間、生活の支援をしてもらうことになった。

この事例では、もしブクワがタンガに移住しなければ、そしてもし偶然に彼と再会しなければ、さらにもし友人が生活を安定させていなければ、彼は以前の借りを返してもらえないか、少なくとも別の形で返してもらっただろう。このように彼らにとって与えたり貸したりした「借り」は、それが返される機会が訪れる未来のその時点ではじめて返されるか、返されないか、あるいはどのような形で返ってくるのかが分かる「約束」であり、しかも偶然に「約束」が遂行された時になって、はじめてそのような約束があったとされるものである――その時が訪れなければ、「約束」じたいがなかったことになる。

【事例】

2016年に香港で出会った頃、香港とタンザニアを行き来しながら、携帯電話の貿易業で羽振りの良い商売をしていたモハメド（仮名）は、2020年に銀行から多額の融資を受けて別の事業をはじめて失敗し、さらに離婚に伴う財産分与により大半の資本を失った。借金取りに追われるようになった彼は、2021年初頭に香港に亡命希望者として逃げてきた。モハメドは、羽振りがよかった頃に、香港で商売がうまくいかず困難に直面していた何人かの同胞の食事を奢ったり、商売の資金を貸したりしていた。2016年10月から2017年３月に調査した際にモハメドに頻繁に支援を受けていた者の中に、中古自動車の貿易仲介業をしていたアリ（仮名）とハッシム（仮名）がいた。アリは、その後に農機具の貿易業に転業し、母国に四つの店を開くまでに成功していた。ハッシムは、相変わらず困窮しており、愛人に外国人ビジネスマンを相手にした「美人局」をさせて暮らしていた。

モハメドは、香港到着後に再起を図るためにアリに支援を依頼した。彼はその時に以前の「貸し」に対してアリがとった態度がおかしいと、メッセンジャーアプリWhatsAppで仲間たちに不満を語っていた。

「俺がアリを助けた期間は三年だ。三年間、俺は香港に来るたびに彼に食事を奢り、交易のついでにアリの商品を無料で母国に輸入し、商売の相談にも乗ってきた。ところが俺が香港に逃げて彼に会いに行ったら、どうだ？八〇〇（米）ドルのカネを渡されたんだ。たしかに高額だ。だが俺が欲しいのはカネじゃない。俺がやり直すチャンスだ。彼はまるで俺が金をせびりにきた物乞いのように俺を扱った。カネをめぐんでくれと頼む相手ならハッシムだっている。彼は、彼の稼業で儲かった日には奢ってくれる」

この事例においてモハメドは、アリには支援を要請し、ハッシムには何も期待していない様子であった。ここには、これまで述べてきた通り、貸した相手がいまだ困難のさなかにある場合、以前の借りは返されなくてもよい、すなわち、ひとたび与えた時間を自分の都合で奪うことはできないという態度が窺える。

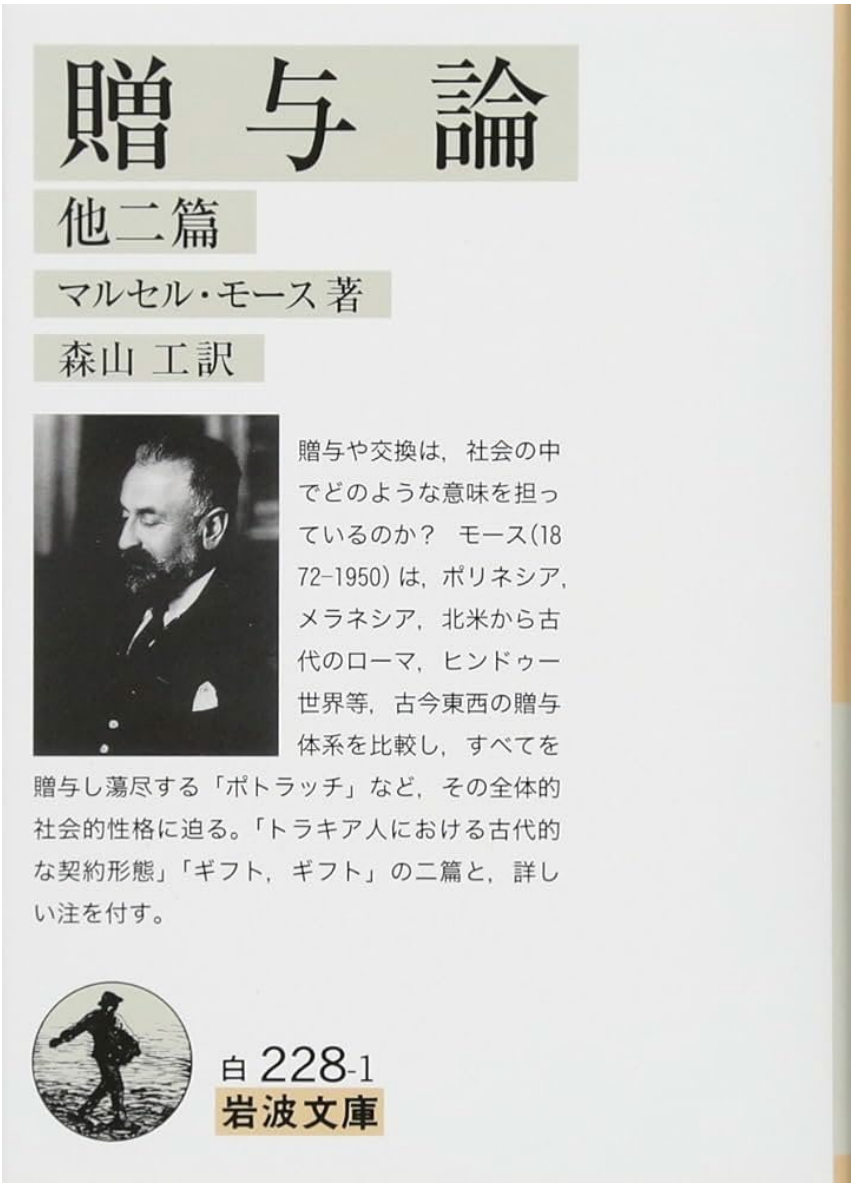
またモハメドはアリに対して不満を語っていたが、アリが支援してくれた金銭、すなわち以前の「貸し」に対する見返りが少なかったとは述べていない。実際、800米ドルという金額は、アリの成功に照らしてみても、私が観察していた香港のタンザニア人たちの貸借の平均額に照らしてみても高額であり、モハメドが香港で新たな商売を始める資本として十分な額であった。

では、モハメドの不満はいったい何に起因しているのだろうか。

マルセル・モースは『贈与論』で、贈り物に対する返礼が起きるのは、贈り物に憑りついた精霊「ハウ」が与え手の元に戻りたいと望むからであるというマオリの情報提供者の説明にこだわった。

贈り物に「贈り手の霊（一部）」が憑りついているとすれば、個人は贈与を通じてさまざまな人間に散らばっていることになる。贈り物を受けっとった個人は、それを返すまで誰かの一部と共に生きることになる。「分人」の世界では、与えられた人に憑りついた与え手の一部が私に戻りたいと望むときに、何かしらの形で返ってくる（モース2009）。

経験的には理解できることだ。



マルセル・モース 著，森山 工 訳
『贈与論 他二篇』
岩波書店，2014年.

贈与を通じて働きかけること

2015年、ある若者は、アルーシャ市の木材問屋から木材を買いつけ、郊外で木材の小売店を営んでいた。しかし、生真面目で人づきあいが苦手だった青年の商売は上手くいかず、資本を失った。彼は、仕入れ先の木材問屋の年配女性に掛け売りを頼んだ。すると、彼女は亡くなった甥が家具職人をしていたことや彼女が使っている家具は甥がつくったものであること、甥も商売が下手だったが器用で評判の職人になったという話をした後、「あなたは甥とよく似ているので、職人になったほうが良い」と彼を諭した。そして彼女は、青年に甥の遺品の鉋などの道具を与えた。

2017年に再会した彼は、かつて木材の小売りをしていた場所で家具職人の工場を開いて独立したばかりだった。彼は、木材問屋の女性にもらった鉋などの道具を見せながら、はにかんで次のように語った。「仕事道具の手入れをしていると、木材問屋の女性のことを思いだすんだ。駆け出しだから、僕にはまだ彼女の亡くなった甥のような技能はないし、正直、経営にも余裕がない。でも、早く腕を磨いて、いつか自分が作った家具を、彼女にプレゼントするのが夢なんだ」。

事例の青年の夢が実現する日が来るかはわからない。彼は、良い職人になれないかもしれないし、仕事は軌道に乗らないかもしれない。だが、少なくとも彼は、木材問屋の女性に家具を注文されたら、通常よりも安く売ろうとするのではないかと思う。経営に余裕がなくて安くは売れず、代わりにその時の彼の技術を最大限に発揮して心を込めた家具を製作しようとするかもしれない。それはわからない。

ただ、彼が手にした道具に木材問屋の女性の人格が憑りついているのは確かだ。彼が語る通り、彼は「甥のような職人になってほしい」と願った彼女の「分身」とともに日々生きている。もしかしたら、彼は、道具の最初の持ち主である彼女の甥の分身とも一緒に生きているかもしれない。両親の形見や師匠から相続した道具、恋人からもらった指輪などと同様に、彼の仕事の道具は、贈り手である女性やその当初の持ち主の代理行為を果たしている。その道具のエージェンシーは、彼自身の生き方、人生そのものに作用している。

もちろん、すべての贈り物に与え手の人格が宿っているわけではないだろう。上述した通り、飲み会で奢られたビールのことは忘れてしまうか、奢り返すことで簡単に解消されるのが普通だ。それは社交という遊び・ゲームなのだ。
しかし、その飲み会が馘首にあった自身を励ますために開かれたものであるなら、話は別だ。

「あの出来事があったから、いま自分は生きている」、「あの時の贈与があったから、人生が変化したのだ」と、有形無形の贈り物の来歴を思い返すことが可能な贈与に、与え手の「人格」が憑りついていると事後的に承認されるのだ。

　そう考えると、仕事を与えたり再起をはかったり、あるいは生きるためのチャンスを贈与したりすることは、間違いなく、そうした贈与の一つだろう。とすると、支援を求める若者たちのピンチに贈与をすることとは、相手に自らの一部を与え、自らの分身をばらまくことと同義である。

ただし、そこで返ってくるのは、私のブクワの事例のように、与えた時点で相手が持っているものではない。誰かに託した個人の一部は、それらの人間と共に与え手のあずかり知らぬ形で変身するからだ。つまり、こういうことである。外部メモリが複数あり、そこに別の誰かが書きこんだ情報を「私のもの」として自在に取りだせれば、パソコン本体の内臓ストレージを増やして情報を蓄積しなくても、私のものや私ができることは増えていく。同じように個人は個人で完結せず、贈与を通じて「複数の関係に散らばる分人」の集合体として存在すると想像することで、自身が獲得した力以上に生きのびる可能性を広げることができる。

ただ、彼らが実際にその時々で引き出すものがパソコンを修理してもらうことでも、詐欺の手口を教えてもらうことでも、**彼らが真に「分かちあっている」ものは、それぞれの人生の岐路、経験的な時間、運命である。**

つまり、彼らは与えた時間でそれぞれが自身と異なる人生を歩み、それぞれが互いの人生に対して何らかの役割を果たしながら「ひとつの人生を築いている」「同じ船に乗っている」という想像を共有しているのであり、それぞれが増やした財や知識や技能を分かち合っているわけではないのである。

それは翻って個々がそれぞれの商売をし、それぞれの人生を自律分散的に生きることを正当化する。

全員が成り上がれば、自身がくさくさした時にやり過ごす方法を誰が教えてくれるのか。皆がひとところに集まっていたら、そこで生きていけなくなった時にどこへ逃げたらいいのか。

「家族皆がばらばらの仕事をすれば、誰かが失敗しても誰かはうまくいき、結果、皆が生き延びられる」という世帯単位の生計多様化戦略と同じように、警官になる者も詐欺師になる者もいて、故郷に留まる者も香港に行く者もいて、考え方や生計手段や信条が異なる人がいるほうが「みなでひとつの人生」においては望ましい。

この意味で、彼らの贈与を通じた賭けは、他者を能力や経歴、資産などにばらばらに切り刻んで将来性を評価し「成功しそうな人」を選んで投資し、個人としてより多くを得ることを目指す「投資」とは異質なものなの。それはむしろ「人生の多様化」戦略なのだ。

このように贈与という不確実な賭けが促進され、分人間の贈与が接続されていくと、「全体的」な個人が互いの金品や技能を分け合うのとは別の、私の部分＝人生は誰かのもの、誰かの部分＝人生は私のものという、分人の部分的連結により「シェアされている人生」が遡行的に築かれていく。

グレーバーが述べるように、将来は不確実であるとして行為し、それゆえ貨幣や数値に換算できない人間や人格の運命に賭ける、すなわち個人が置かれた社会的文脈から彼／彼女を引きはがさないどころか、その社会的文脈の違いに賭けていくと、二者間の関係から出発して、輪郭が不明瞭な、アナキズム的な基盤的コミュニズムのイマジナリーな全体性が築かれていくのだ。

誰かはわからないけれど、自分の人生はきっと誰かには助けてもらえるという社会が立ち上がっていくのだ。

しかしながら、現実的には、贈与された人々が、いつか与え手が自身のもつ何らかの財や情報、技能をその人が必要としたタイミングで与えることをあたかも当然のことにしていくと、「私のものは私のもの」という所有意識は、ふとした契機で崩される不確かなものになってしまう。

それどころか、贈与を受けた者（「賭けられた」者）にとって、自身の人生を歩むことがその人自身の問題ではなくなってしまう。人生がうまくいかなくてもよいが、各人は「与え手たちとは異なるユニークな人生を歩むべきだ」が命題になると、「あなたらしくあれ」を商品として動員する資本主義経済の論理に回収されてしまうように思われる。

私たちの資本主義経済では、「あなたらしさ」がその他の人々との差異として、商品のように計量可能な価値へと還元し、それを説明する責任を問う監査文化が蔓延している。そのような計量可能な「あなたらしさ」に基づいた自己実現の要請は、人格は唯一のものであり、いかなる金品、人間でもってしても置き換えることができないという人間経済の論理と矛盾する。

だからこそ、受け手が将来に借りを与え手に返すときにおいて、かつての与え手が欲していて、かつての受け手が可能であれば、何を返してもよいわけではない。

ここにおいて、本当にやり取りしているのは「金品」ではなく、そして「思い」のような無限なものでもなく、あくまで「時間的・チャンスの贈与交換」なのだという了解は、シェアされた世界への「埋め込み」とそこからの「切り離し」を同時に行うことで、個的な「自律性」「自由」を実現するものとして機能するように考えられる。

時間を与えあうということ

いまいちど時間の贈与交換の議論に立ち戻り、事例にあげたモハメドの不満を検討してみよう。

彼の不満は、アリが預かっていたモハメドの一部を800米ドルという「配当金」あるいは「手切れ金」のような形で返すという屈辱を彼に与えたからだ。

モハメドは親切にしたときに、アリがその時に必要としていることのうち彼ができることをしたのであり、アリの成功を見込んで親切にしたわけではなかったはずだ。つまり、自分が与えた金品が彼の運用でいくらに増えるかを考えていたわけではない。モハメドにとってアリに与えたものは、難局を切り抜けて人生を変える時間だ。だからモハメドが返礼されると思っていたのも、難局を切り抜けて人生を変える時間だ。それは話を聞いたり、衣食住を与えたり、アイデアを考えたりといった、現在のアリだからこそできる役目のようなものである。

直感的にはわかることは、なかなか説明しづらい。

たとえば、過去に羽振りが良くて何かと助けてくれた友人があるときに落ちぶれてあなたの目の前に現れ、立場が逆転していたという事態を想像してみて欲しい。そこであなたは、彼にかつて与えられた支援よりも大きな支援を返したとする。それは端的に言って勝利宣言だ。与えられた時点から返す時点までの人生を、どちらが富の蓄積をしたか、成功したかという競争の時間に置き換えてしまうことに等しい（端的に言って、嫌味なのだ）。

でも、あなたと彼は、別々の人生を歩むことで、「誰かがうまくやれば、誰かの助けでなんとかする」という「人生多様化」戦略の一翼を担ってきたのだ。だからあなたが彼に対して与えるべきものは、彼の人生を彼の人生として軌道に乗せ、そうすることであなたたちの人生を動かすようにすることなのだ。

商人たちの助けあいでは、ひとたび助ける／借りを返そうとすると際限なくあれこれと要求するが、難局を乗り越える時間以外のものは要求しないという態度が観察される。

時間や機会を返すとは、過去に10回奢られたので10回奢り返すのでも、豊かになったので彼に大きな資金を与えるのでもなく、相手が自身の道を切りひらくのに寄り添うことなのだと思われる。それは3回奢ることで終わることもあるだろうし、100回奢っても終わらないかもしれない。だからこそ、返されている側は「待ってもらった」、すなわち「時間や機会を与えられた／返された」と考える。楽しみのために分かちあうのなら話は別だが、かつての返礼として高級料理を奢ってあげる必要はない。むしろ、そうした支援は、時間を返す行為とは別もので、新たな負債を生み出したり、受け手自身の自律性や尊厳を損なうものになったりしうる。それよりも、預かっていた分人の価値を第三者との関係に広げ、活用することで彼が得た「何ものか」を還元してくれたほうがいい。もちろん現金を返してはならないというわけでもない。

【事例】

香港に在住していた中古車ブローカーのカラマは、2021年にタンザニアに強制送還された。調査期間中に彼に世話になった私は、母国に戻った彼から支援を求める連絡をSNSで頻繁に受けた。彼は「俺に中古車を掛け売りしてくれる日本企業を探してくれ」「君自身で日本製の家電など儲かりそうなものを買って信用取引で輸出してくれ」などと私にとって困難な要求を次々としてきた。

私が「生活に困っているのなら、送金しようか」と申し出ると、彼は「俺は魚よりも、魚を獲る手段が欲しい」と怒ったように言った。しばらくした後に彼とチャットしていると、「漁船のエンジンの仕入れを計画しているので資金を貸してくれ。君が次にタンザニアに来た時までには軌道に乗せるから」と無心された。私は元々あげる予定だった生活費をエンジン仕入れの資本の一部として送金した。以来、彼からの要求は止まった。

「彼の人生に私も乗る、その先の岐路を分かち合う」という了解が築かれたならば、一度きりの金銭を与えることでも構わない。そうして時間を与えあうことは、受け手が商売をし、人生のどこからの岐路で得られた知識や情報が与え手自身の商売に還元され、商業経済の原動力に再び転換されていくのである。

まとめ

今日の講義では、タンザニアの零細商人の事例から、市場交換と贈与交換のどちらにおいても金品や親切の授受とは別に「時間を与えあう」という贈与交換が展開していることを述べてきた。

零細商人の社会では、商品代金の支払いや贈与した金品・親切への返礼といった負債が極めて長期にわたって（ときに永遠に）解消されないことが頻発する。負債を回収できないのは、各人にとって時間は等価でなく、また時間が計算できないものであるゆえに、与え手と受け手、債権者と債務者のあいだの対等性を回復しうるのに適切な期限を設定できないからであろう。

だがそのことは、負債が消滅したことを意味しない。

商人たちは、ここでべつの贈与交換を設定する。商人たちは、金品や親切に対するやり取りを「時間的な余地やチャンスの贈与」に転換し、そうすることで人生において偶然に互いの生＝時間が交わる時に、自身の商売、人生を切りひらく時間や機会の返礼を受け取ることで帳尻を合わせようとする。

すなわち、商業経済で稼いだ富をそのまま蓄積するのではなく、人間関係の創造とその部分的連結による「みなでひとつの人生」の創造へと転換し、その人間経済で生まれた何らかのチャンスをふたたび商業経済を駆動させる原動力にするのだ。

ともすれば、市場原理を破綻させかねない行為だが、商業経済から人間経済への雪崩がギリギリのところで商業経済に押し戻されていくのもまた、人間が知覚し生きている時間が質的な意味で不均質であり、偶然に満ち溢れているからなのではないだろうか。

「私はもう一人で生きていける」「突然に目の前に晴れ間が開けた」という瞬間が個々の主観のうちにやってくるからこそ、他者に与えた時間という目に見えない贈与も有限だと想像できる。

それは、私たちの社会の感覚で言うと、子どもが巣立つという時間感覚と似ているだろう。

子供はふつうそれぞれのタイミングで親離れする。親はその時が来るのを待つ。私たちの社会では、親がいつまでも子供を扶養し続けること、巣立った子供の人生に依存したり過度に干渉したりすることに禁忌があるようにふるまい、そして親から子への贈与をあたかも無償の贈与であるかのように互酬性とは何ら関係ないもののように扱う。

だが、親から子への贈与によって生かされてきた子供は文字通り親の分身であり、彼らはやがて誰かの配偶者として、仲間として、師匠として諸関係の結合中枢となることで、親自身の分身を拡張・増殖させていく媒体となる。

これと似た方法で、商人たちは商業経済で生み出された富を「誰かを生かす」ための贈与へと転換させて人間のかたちで殖やし、その者たちに託した分身そのものを媒介として経済を築いていくのである。

このようにわれわれが分かち合っているのは人生なのだという想像を、あなたと私、家族、仲間といった関係から商業経済で関わる不特定多数の人間に広げることは、なんだか妄想じみているように聞こえるかもしれない。

それでも私が欲する時に私と運命をともにしてくれる誰かがいつでも見つかるような世界、私が何を与えたかしたかに関わらず、私が生きていくチャンスをくれる世界を、資本主義経済のただなかに切りひらくことができたとしたら、そこには希望があるように私は思う。

そして、それはじつは簡単なことなのだ。私たちが、人間はみな同じだという仮定に基づいて貸し借りの帳尻を即時的にあわせようとせず、相手の状況や人格は私とはおそらく違うということにほんの少し思いを馳せて、相手の人生に賭ける、待ってあげるだけでいいのだから。

より具体的には、自分の人生に賭けるのと同じように、多様な人びとの人生に賭ける仕事を大切な仕事として高く評価することでもいいし、他者の人格や状況を無化して一律に評価するシステムを緩めるのでもいいと思う。

グレーバーは、「被雇用者本人でさえ、その存在を正当化しがたいほど完璧に無意味で、不必要で、有害でもある雇用の形態」（p.19）についても論じている。それはたいてい高給取りで良い仕事。

だが従事者本人は無意味で無用な仕事だと認識しており、しかも必要で重要な仕事であるように取り繕わなければならない。それが従事者に精神的苦痛を与えるのだ。

では、なぜこのような仕事が生み出され、増殖しているのか。

デヴィッド・グレーバー 著，
酒井 隆史，芳賀 達彦，森田 和樹 訳
『ブルシット・ジョブ　クソどうでもいい仕事の理論』
岩波書店，2020年.

テクノロジーが発展したら、労働時間が大幅に短縮されて人々がそれぞれに抱く計画や楽しみ、あるいは展望や理想を自由に追求することが可能になるかもという夢もあった。だが実際に起きたことは、企業法務や学校管理・健康管理、人材管理といった管理部門の肥大とそれに関わる書類仕事の増大だ。

大学教員をしていても日々実感する。私の仕事は文化人類学を教え、学生や院生を育てることであり、調査研究を通して学術と社会に貢献をすることだ。ところが、授業アンケートとそれを受けた改善計画書、計画通りにできたかの自己評価書、助成金の申請書、さらに優れた計画書や申請書を書くための講習と講習に申し込むための申請書、より良い講習会にするための提案書と、「計画のための計画のための計画…」というかたちで書類仕事がどんどん増えていく。

その結果、学生の話をじっくり聞いたり、日々更新される研究成果を反映したりして授業内容を柔軟に刷新する時間が奪われていく。これでは本末転倒だ。何より問題なのは、報告書の一貫性を気にして去年の計画書に従うことだ。去年の学生と今年の学生は違うし、私の研究も去年より進展している。いま目の前にいる学生がしてほしいと語り、今の私ができることをしたほうがいいではないか。

こうした転倒は、私たちの社会生活の多くを覆っている。

いまや業績表や評価書といったかたちで専門家や特定の立場にある者が他者を評価するばかりでなく、ある時はテレビの視聴者として、別の時にはTwitterの投稿者としてみんながみんなを評価する時代になった。

こうした「みながみなを査定するように評価しあう文化」＝「監査文化」でも、社会的文脈から各人を引きはがす暴力が蔓延している。SNSに投稿された断片的な情報から会ったこともない人間を評価・裁定することに疑問を抱かない人、過去の行いを掘り起こして仕事をキャンセルする文化も台頭した。

他方、人間の創造や破壊に関わる、育児や介護、看護などのケア労働や、エッセンシャルワークは、低賃金労働になった。弟子を育てる、同僚の悩みを聞く、知人の再起に寄り添うといった仕事は、本来の仕事として評価されなくなったり、アウトソーシングやオートメーション化されたりしている。

人間経済は、汎用性のある倫理や正義では動かない。たとえば、失敗した友だちを寛大な態度を許すことは友を救う時もあるし、ますますみじめな気持ちにさせて友の尊厳を脅かす時もある。良かれと思ってしたことが相手を傷つけることも、後から振り返って「雨降って地固まる」となることもある。

それでも人間経済は、何が正解か分からない中で、人が人に人としての関心を持ち、その時に相手が必要とし、自分ができることを賭け事のように繰り出しながら経済を営んでいる状態だ。そうした正解の分かりにくさを、「効率」や「合理的配慮」の細かな条件のような「市場の言語」に置き換えていった先に、人間が数値や貨幣に置き換えられることにますます疑問をもたない世界ができているのだと思う。

でもそれでいいのだろうか。AIやテクノロジーによって代替不可能なものとは数値やお金に換算できないものではないだろうか。論文の引用数が増えたり、販売した本の星印の数が増えたら嬉しいし、利益や地位の上昇に結びつくけれども、「もし大学の先生になれなかったら、タンザニアで一緒に暮らそう。食っていくだけならなんとかなるさ」という友人たちからの承認はそれとは別の種類の嬉しさを呼び起こす。こうした人間どうしの関わりの余地が数値や貨幣に置き換えられていくことが自然化されていく事態は恐ろしい。

そうした人間どうしの関わりの余地をなくす空気を私たちは見直すべきかも。